

「イロガワリというキノコ (1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

さんざん紹介してきた「モジホコリ」は粘菌(真正粘菌)の一種である変形菌の一種である。かつては菌類に分類されていたこともあったが、現在は菌類(菌界)ではなく、「アメーボゾア界」という独立した「界」に所属している。

今回は正真正銘のキノコ(真菌類)の話題である。実は、キノコ(木の子・茸)の学術的な定義はない。真菌類の担子菌類や子囊菌類の中で、目に見える大きさの子実体を、便宜的に「キノコ」と呼んでいる。



写真は、モリノカレバタケという菌類の菌糸である。カラマツの葉を主体とした土壤に「まん延」しているのがわかる。実はキノコ(真菌)の仲間は、一年のうち大部分を地中、樹木中、腐葉土中など、観察者の目にとまらないような場所で、菌糸として生活している。ヒトの目に触れない場所で、変形菌の変形体と同じように、菌糸を広げながら成長しているのだ。その生活の中で、温度、水分、日照(天気)などが、その菌種に合う条件になると子実体を形成し、はじめてヒトの目に触れるようになる。菌類やキノコの図鑑を見ても、菌糸を紹介したものはもちろんなく、掲載されているイラストや写真は、すべて子実体のものばかりである。専門家でも、菌糸だけで種の同定はできない。

そのキノコの子実体は、実に多様性に富んでいて、「どうしてこの形に進化したの?」と問いたくなるようなものばかりだ。名称(和名)も実に多様で、そのキノコ(子実体)の特徴を、できるだけ少ない文字数で表現しようと、工夫しているものが多い。



写真は「ヒロチャワンタケ」(緋色茶碗茸)というキノコで、「緋色」(オレンジ色)の「茶碗」のようなキノコ(茸)という意味だ。英語では Orange-peel Fungus (ミカンの皮キノコ) と呼ばれている。どちらも実によく特徴をとらえた名称だと思う。そんな中でも「傑作の和名」が「イロガワリ」というキノコだ。



イロガワリ *Cyanoboletus pulverulentus* は、あだ名などではなく、正式な和名である。イグチ科のキノコで、傘の裏にはシイタケのような「ヒダ」はなく、「管孔」と呼ばれる小さな管状の穴がたくさんあり、そこに胞子をつくる「担子器」が形成される。このイロガワリが、まさしく「色変わり」なのだ。この和名をつけた学者(或いは昔からそう呼ばれていた)は、素晴らしいセンスだと思う。ちょっとした実験で、まさしく名前の通りに色が変わるので、私は森の中でこのキノコを見つけると、嬉しくなってしまう。